

海洋資源に関する参与会議での主な指摘事項

< 鉱物・エネルギー資源 >

- メタンハイドレート、海底熱水鉱床などの調査・開発を、EEZのみならず、公海部分まで戦略的に実施していかなければならない。
- 各省庁、民間も含めて総合力を発揮して海洋資源を開発すべき。
- 資源開発のあめの実証実験を行っているが、事業化のためにはコストが高い。ITやバイオなど専門外の技術も持ち寄り、資源国との共同研究に繋げるなどして活用していきたい。各分野からの資源開発技術に関するアイデアを活用して資源獲得をしていきたい。
- メタンハイドレート、海底熱水鉱床について、産業化の観点からの説明が不足している。現状の評価が非常に重要。うまくいっていない場合は、予算を入れて強化が必要。
- 資源開発について、やる気のある民間事業者から意見を聴きながら、協力して推進すべき。
- 海底鉱物資源や海底熱水鉱床の調査について、広大な海域を調査するプログラムが無い。調査することも産業になるが、調査産業が海外に進出できるような産業となる道が示されていない。
- 資源開発について、技術的にどのような問題があり、どのように解決するのか具体的に知りたい。産業化するための採算性は技術的などころが大きく、これらの情報を理解し、共有したい。
- 資源開発について、最後の段階として商業化を具体的な形で書いていくのが重要だろう。

< 海洋再生可能エネルギー >

- 海洋再生可能エネルギーをはじめとした各施策を推進するに当たり、各省庁間で政策目標と達成のためのプロセス(法整備)の共有ができていないのではないか。
- 洋上風力発電について、具体的な政策目標が無い。2020年にはどれぐらいの規模になるかなどを示すことが、産業界にとっては必要である。

- 海洋再生可能エネルギー普及には、エネルギー基本計画とのリンクが重要。

<共通>

- メタンハイドレート、石油・天然ガスなどの資源開発、洋上風力発電は喫緊の課題であり、商業化に向けて走る絵を示している。各プロジェクトの最終形を持っておかないと国民にも民間企業にもわかりにくい。
- 産業化に向かう分野として、伝統的な資源、メタンハイドレート、海底熱水鉱床の3つ、そのほかに洋上発電があり、それぞれ産業化までの距離が違う。産業化できるかはコストによって決まるが、今の段階では何年後に実用化できるか見えてこない。R&Dの課題を明確に抽出して、いつまでに解決していくかということは重要である。コストとリスクは必ず産業化に絡む要素であり、コストは色々な技術開発や努力で実現できる可能性が出てくるが、誰がリスクを取るかということが問題。